般入試① 問題 (国語)

注 意 書 き

・試験開始の合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。

・解答用紙二枚のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってかまいません。

・この冊子には問題が一ページから二二ページまであります。万一、足りない部分があったり印刷

が見にくかったりする場合は、手を挙げて試験監督に知らせること。

・解答はすべて解答用紙の枠の中に記入し、用紙には、関係のない文字・記号類を書いてはいけま

せん。

・字数指定のある問いは、句読点なども字数にふくめること。

解答用紙を集め終わっても、試験監督の指示があるまでは席を立たないこと。

高校二年生の夏休み、大田はひょんなことからアルバイトとして、先輩の娘である鈴香の面倒を見ることになった。はじめは一歳の鈴香に手を 焼くが、次第に打ち解けて、毎日公園で遊ぶようになった。公園では愛ちゃんや由奈ちゃんという友達もできた。そんなある日、大田はいつも 走る喜びを知った大田は、高校で陸上部に入部するが、様々な原因から部をやめて、再び前のようなさえない生活を送ることになってしまった。 (「俺」) は、何の目標も持てずさえない生活を送っていた中学三年生の時に、先生のすすめで駅伝のチームに入り充実した時間を過ごした。 中学陸上部の先生だった上原や陸上部員と出会う。上原に誘われた大田は、部員たちとタイムレースをすることになったのだが……。

「よーい、スタート」

分の体を確かめながら、 分台で走れただろう。あれから二年。 上原の合図に合わせて、一斉にスター 足を進めた。 無駄に過ごした時間は、俺をどれくらいなまらせてしまっているのだろうか。 トを切る。 俺の体もぐんと前に飛び出る。このトラックを七周半。 以前 の俺ならり 俺は自

を走り慣れてないやつが多いようで、 月は経っているのだろうか。中学生たちの走りもそれなりに様にはなっている。 連なって走っていたのは200メートルほどで、 俺より前を走るのは二人だけだ。 一周を過ぎるとだいぶ差がついてきた。駅伝練習がスタートして、 それでも、 まだ夏休みの時点では長 距離

ないから体が無駄にはねているけど、スピードがある。体にペースが染みついていけば、力が付きそうだ。 穏やかな走りだ。もう一人は真っ黒に日に焼けたがっちりしたやつ。駅伝のために集められたのだろう、 一番前を走るのは崎山。一定のリズムを刻みながら進んでいる。完全に走り慣れているし、体に負担がかからないような 長距離がなじんで

「二周目終了、この周78、79、」

で行けば、3000メートル10分を切れる。なかなかいい速度だ。それに、俺の体はまだどこも疲れてはいない。毎日鈴香 の家まで走っているし、 スタート地点を通過すると、ラップタイムを読み上げる上原の声が聞こえた。最初の周とほぼ同じタイムだ。この ショッピングモールや駅に行くときも走ることが多い。 いつもジョグ程度の速さだけれど、 ス

鍛えられているようで、まだ息も上がっちゃいない。 いいぞ。俺は自分の体に手ごたえを感じた。 それどころか、ここにきて足や腕にエンジンがかかり、 勢いを増して

「三周通過、この周76、77、78……」

もでてきた。 持つのだろうか、 |が3メートルほど前を走り、俺の真ん前に色黒のやつが足音を響かせながら走っている。パワフルな走りに、最後まで トルを過ぎても、 とこっちが心配になってしまう。ほかの六人はだんだん後れを取り始め、 まだ速度は落ちていなかった。練習を積んだ中学生と対等に走れるなんて思った以上だ。 半周近くの差が開いているやつ

「四周終了、この周77、78」

詰めておかなくては。 はだめだ。俺は腕を軽く振って息を整えると、もう一度足に力を込めた。ここで少し勢いをつけよう。 と同じように息が乱れている。さすがにこの速度で3キロを走るのはきつい。だけど、 一切乱れていない。なんという正確な走りだろう。その一方で、俺はだんだん息が上がってきた。前を行く色黒のやつも俺メッル゚ル゚ 1600メートルを通過し、 わりいな。 俺は上原の読み上げるタイムに、 俺は心の中でつぶやきながら、すぐ前を走る背中を追い抜いた。 驚いた。一番前を行くすらりとした背中。 9分台で走るには、 パワーのあるうちに 崎山 崎山から離れて 0) ペースは

「五周目、76、77、78……、残り二周半」

前へ前へ足を運んだ。 練習に参加していたときは、 2000メートル経過。それでも崎山は速くなることも遅くなることもせず、同じ間隔で足を運んでいる。 他とは全然違う毎日を重ねてきたはずだ。 -か弱くすぐにバテていたというのに。こいつはこの二年、 うっかり気を抜いたら一気に離されてしまう。俺はしっかりと背中を見つめ どれだけ練習を積んできたのだろ 一年生で駅伝

「六周経過、この周79、80……。残り一周半」

崩れ、息が上がる。先を行く崎山は誰かを抜かしてもペースに変動がない。相変わらずリズムを刻むように走っていく。細分が 上原の声が響く。 体幹が鍛えられているのだろう。 あと600メートルだ。七周目に入って、俺は周回遅れのやつを二人抜いた。そのたびに少しペースがあと600メートルだ。七周目に入って、俺は周回髪 体はまったくぶれがない。すげえペースメーカーだ。 このまま、 崎山について

けさえすれば、俺も9分台で3キロを走りきれるだろう。

足も付いてくる。よし、いける。俺は大きく息を吐くと、そのまま崎山を抜き去った。 だやってきていない。ここでスパートをかけるのは早すぎるし、もう体も疲れかけている。でも、このペースから外れたい と、跳び出したいと体は言っている。あとのことはどうだっていい。体中弾ませて、無鉄砲でも前に向かっていく走り。そと、メヒ れが俺の走りだ。それをしなくちゃ走る意味はない。大きく腕を振ると、俺は体ごと前に送り出した。その勢いにちゃんと それじゃだめだ。これではおもしろくない。この走りは俺の走りとは違う。体が空っぽになっていくあの快感はま

「あと、一周400メートル」

ていた。レース展開なんて考えず、 てはいられない。体があの夏を思い出して、何度も何度もスパートをかけている。あのころの俺はいつも弾丸のように走ってはいられない。体があの夏を思い出して、何度も何度もスパートをかけている。あのころの俺はいつも弾丸のように走っ 上原の声が聞こえ、崎山もペースを上げ俺につけてきた。さすが部長だ。まだ余力を残していたんだな。悪い ただゴールに向かうことに、ただタスキを渡すことに、必死だった。

「ラスト200、がんばって」

真後ろにぴったりとついている。そして、「やっぱり正しい走りが一番なんだな」そう思った瞬間に、するりと抜かされて 出した。むやみにかけたスパートのせいで、 しまった。 ここからはもう短距離だ。このままゴールまで一息に行こう。だけど、さすがに俺の体は重くなって足の回転が遅くなり 息も完全に乱れている。そんな俺に反して、 崎山は自分のペースを取り戻 Ļ

たら、二位だけは保たないとな。 やめて、何ひとつやりきっていない俺が勝てるほどレースは甘くないのだ。どんどん崎山の背中は遠のいていく。こうなっやが 当然だ。たまたま調子よく走れていただけで、まじめにやってるやつにかなうわけがない。高校の陸上部もいつのまにか せめて9分台で走りきろう。そう呼吸を整えて、 腕を軽く揺すったところに、声が飛んで

「おじさん、ファイト!」

愛ちゃんと由奈ちゃんの声だ。

「ほら、しっかりー! 前離れてるよ!」

お母さんたちも大きな声で応援してくれている

「ばんばってー」

そして、一番よく聞こえるのは、 みんなのまねをして叫ぶつたない鈴香の言葉だ。

他校の選手への声援が飛ぶ中、 勢いがついたんだっけ。 が加速し、俺を引き離したときだ。担任の小野田の声が聞こえた。「走れ! 中学校駅伝のブロック大会。 俺は孤独にそれでもがむしゃらに走っていた。そんな最後の上り坂。声援を浴びた他の選手 駅伝は6区間もあるから、わざわざ俺が走る2区を応援しにくるやつなど誰もいなかった。 お前ならやれる」って。その声で俺の体は、

煎抜けるよ!」

「あと少しファイト!」

を繰り返している。 お母さんたちの声援の合間に、愛ちゃんたちがきゃあきゃあ叫び そのそばで、 鈴香は「ぶんぶー」と「ばんばってー」

— 4 **—**

で驚くくらい、手にも足にも力が満ちていく。崎山の背中は手を伸ばせば届くところに近づいた。残りは50メートル。ここ ずっとこんなふうに走りたかったんだ。 ですべてを出し切ってやる。毎日走ってるやつらには悪いけど、俺はやれるんだ。俺は走りたかったんだ。お前ら以上に、 ただのタイムトライアル。それなのに、声をかけられると、残された力が沸き立ってくる。まだ余力があったのかと自分

「ラストー、ファイト。ここまで」

山よりわずかに先に走りぬいた。 ゴール地点に、俺は倒れこむように突入した。なりふりかまわずただ前に突っ込んだ。そして、 倒れこんだ分だけ、

ゴールした俺はそのまま動けずべたりと座り込んでしまったけれど、崎山は涼しい顔で汗をぬぐっただけだった。

お前、すごいじゃん

他は思わず崎山を見上げて言った

「負けるわけないって思ってたんですけど……。さすがっすね」

崎山はそんな俺に静かに微笑んだ

「いや、完全にレースはお前の勝ちだわ。あと10メートルでもあったら完敗だ」

俺は正直に言った。最後の最後、ただ声援に乗せられて体が進んだだけだ。

「駅伝では、僕も倒れるまで走ります」

「そんなことしたら、お前ダントツ一位だな」

「ありがとうございます」

崎山は軽く頭を下げると、 ほかのやつらに「腕を振れよ」「あと200」などと声をかけ始めた。

俺はその様子を見ながら上原にもらったアクエリアスを飲みほした。もう高校生になってしまった俺は、たかだか300 すごいよな。中学生って。走りきって疲れた後に、俺に負けて悔しい気持ちのままで、誰かに声を送れるなんて。

メートル走っただけで、完全に体は空っぽで、立ち上がることも声を出すこともできないくらいへばっていた。

「まだまだ走れるんだね」

ようやく立ち上がった俺に、上原が言った

「そうみたいだな」

俺はトラックを眺めながら答えた。駅伝チームのやつらはタイムトライアルを終え、ジョグを始めている。

んなは、穏やかですっきりしたいい顔をしている。

「大田君もダウンしといたほうがいいんじゃない?」

「いや、いいわ」

「そう? 勢いよく走ってたから、明日体にきそうだけど」

明日まで待たなくても、 すでに太ももやふくらはぎは張っている。だけど、さすがに中学生たちと並んでジョグするのは

脱れる。

「俺、走りたかったんだな……」

だろうなとは思う。 俺は一つになって走る八人の背中を見ながら言った。あの中に入りたいわけではない。でも、 あんなふうに走れたらい

「また走ればいいじゃない」

上原が何でもないことのように言った。

て感じだけどな」 「そんなうまくいくかよ。俺の高校の陸上部なんて活動してないのも同然だから。ま、あの高校に入った時点で終わったっ

「大田君、トラック専門に変更したの?」

上原が首をかしげた。

「何も専門でやってねえけど」

「じゃあ、グラウンド以外も走ればいいじゃん。高校の陸上部って、学校のグラウンドしか走っちゃいけないわけじゃな

んでしょう。駅伝のときは、校外も走ってたじゃない。あぜ道も山道もアスファルトも」

たってかまわない。じっとしてはいられない、体が自然に動くあの衝動。それに従ってみたいんだ。 達じゃなくたっていい。誰だっていいから、誰かと同じ場所へ向かって、 れでいいなら、俺は毎日走ってる。そうじゃないんだ。さっきの3000メートルみたいに、仲間じゃなくたっていい、友 上原の言うとおりだ。だけど、そうじゃない。俺はただ走りたいんじゃない。どこでも走ればいいってわけではない。そ 体を、気持ちを動かしていたい。苦しくて辛く

「まあ、そうなんだけどさ」

上原は

8 とう言っていいかわからず、あいまいに答えると、

と言った。

「そっか?」

いつだって、どこだって、 だいたい誰かが走ってる。それに、大田君を駆り立てるものだって、 そこら中に転

上原ははっきりと言った。

いんだ。義務教育を卒業した俺を、 くてはいけない。それはとても難しい。 そうだとして、その場所をどうやって探せばいいのだろう。どうすればそこへたどり着けるのだろう。 わざわざ引っ張ってくれるやつはいない。この手を自分で伸ばして、この足で向かわな もう中学生じゃな

「もうガキじゃねえんだから、 誰かが手を差し伸べて引っ張ってくれるのを待ってたら、 だめなんだよな……」

俺がつぶやくのに、上原が、

「そんなこともないんじゃない?」あそこで、 大田君に必死で手を伸ばしてる子がいるけど」

と笑った。

「あ、ああ。鈴香だ」

うにと、 どうやら、今は鈴香のもとへ行くことがやるべきことのようだ。 ベンチのほうに顔を向けると、 お母さんたちに押さえられながら、手を振っている。あの小さな手は、くたくたになるまで、俺を走らせてくれる7のほうに顔を向けると、鈴香は「ぶんぶー」と言いながら俺のほうへ手を伸ばしている。練習の邪魔にならないよ 俺を走らせてくれる。

「俺、そろそろ行くわ。あ、そうだ。二学期になったら、たまに駅伝練習見に行ってやろうか」

俺の申し出に、すぐさま「やめてよ」と上原は首を振った。俺が中学生のときにも、 -ムにとってもいい刺激になりそうなのに。首をかしげる俺に、 たまに卒業生が来ていたし、

「大田君の走る場所は中学校にはないよ」

と上原が言った。

「あんだよ、それ」

り返らなくたって、 「大田君が走るのは、 たくさんのフィ 今まで通ってきた場所じゃなくて、これから先にあるってこと。まだ十六歳なんだもん。 ルドが大田君を待ってるよ」 わざわざ振

そう、なのかな」

なんとなく教師らしい発言に、俺が素直にうなずくと、

「本当は大田君が来たら、 みんなびびって練習にならないしね。それに、金髪で中学校入られたら、 教頭先生に文句言われ

と上原は肩をすくめた。

「ったく、失礼なやつだな」

「ごめんね。教頭先生に怒られるの面倒だから」

上原はへへへと笑った。こいつと話していると、本当に気が抜ける。

「ま、ほかの場所探すわ。今年も県大会出てくれよな」

俺がそう言うと、

「うん。わかった。大田君もがんばって」

と上原は軽く手を振った。

つもいる。 がんばってか。すでに努力している相手に失礼な言葉だとか、プレッシャーを与える言葉だとか、 小難しいことを言うや

-- 8

思える。 でも、シンプルでいい言葉だ。「がんばって」そう言葉をかけてくれる人間がいるだけで、 自分も捨てたものじゃないと

「ぶんぶー、ばんばってー」

「もう終わったよ」

よし。アクエリアスを飲んで体も回復したし、 愛ちゃんたちに笑われながら、 覚えたての言葉を使うのがうれしいのだろう。 最終目的地までダッシュするか。俺は残っている力すべてを使って、寒を使うのがうれしいのだろう。鈴香は何度も俺にそう叫んでいる。

限の声援を送ってくれた鈴香たちのもとへ向かった。

- ことが楽しくてたまらなくなっている。 久しぶりにタイムトライアルを走るのは不安ではあったが、 走り出してみればそんな不安はすぐにふき飛んで、
- く走れていることに満足している。 競技として走るのは久しぶりだが、 毎日走っていたことが結果的にはトレーニングになっており、思ったより調子よ
- ところを見せられると安心している 久しぶりとは言え、上原にみっともない走りは見せたくないと思っていたが、二周目を終え勢いがつき、
- ことをうれしく思っている。 久しぶりに走っているのに、 一周目と同じラップタイムで二周目を走ることができ、 走るリズムを身体が覚えてい
- の中から一つ選び、 線部2「俺とは全然違う毎日を重ねてきたはずだ」とあるが、この時の 記号で答えなさい 「俺」の気持ちとして適当なものを、
- てこられた崎山のことをうらやましく思っている。 高校の陸上部もやめ、ともに走る仲間を失って孤独を感じている自分とは違い、 仲間に囲まれて充実した練習を続け
- うていかなわないとあきらめの気持ちが生じている この二年間まじめに練習したことで大きな成長をとげた崎山に力強さを感じ、ろくに練習してこなかった自分にはと
- なるには相当な努力をしたはずだと感心している。 それほど努力しなくても中学の駅伝では活躍できた自分とは違い、 初めは弱かった崎山がこれほど速く走れるように
- であろう崎山の充実した様子に手ごわさを感じている。 打ちこめることのないままこの二年を過ごしてきた自分をふがいなく思うとともに、 その間ひたむきに練習してきた

- 次の中から一つ選び、記号で答えなさい。 線部3「いや、 それじゃだめだ。これではおもしろくない」とあるが、この時の「俺」の思いとして適当なも
- の走りをしたいと思っている。 すぐれたペースメーカーである崎山にあわせて走っていくのではなく、 常にトップでゴールを目指すような自分本来
- 意味はないと思っている。 正確なラップを刻む崎山の走りに揺さぶりをかけて今後の崎山の成長をうながすような走りをしないと、 自分が走る
- りをしたいと思っている。 一定のリズムに乗って最後まで安定した走りをするのではなく、 ペースは崩してでもすべての力を出し切るような走
- ないと思っている。 たとえこのままのペースに乗って九分台で走るという目標を達成できたとしても、 一位でゴールに入らないと意味が
- 問四 な気持ちになったか。 線部4「お母さんたちの声援の合間に、 次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。 - 繰り返している」とあるが、 この声援を受けて、

— 10 **—**

- T しゃらに走ろうという気持ちになった。 お母さんたちや女の子たちのはなやかな応援に乗せられていい気持ちになり、 がらにもなく全力をふりしぼってがむ
- 絶対に勝つんだという気持ちになった。 ただのタイムトライアルだからといまひとつ気合が入っていなかったが、にぎやかな応援を受けて気分が盛り上がり
- 弱気になりかけていたところに、自分のことを大切に思ってくれる人の声援を受けたことで、 まだやれるという気持ちになった。 力を取り戻すことがで
- エ 全力で走ろうという気持ちになった。 自分が今こうして走っているのは、 自分自身のためだけではないことに気づき、 自分を応援してくれる人のためにも

当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。 線部5「崎山はそんな俺に静かに微笑んだ」とあるが、 崎山はなぜ「静かに微笑んだ」のか。 その理由として適

- 走ることをやめた今の大田ではもはや自分の相手にはならないだろうと思っていたが、 未熟な自分のことを笑いたくなったから。 その油断が原因で敗北したこ
- 練習を積んでいない大田にまともな走りができるわけがないと思っていたが、 -ルに倒れこんだ姿を見て、 大田のことを見直したから。 最後まで力をふりしぼって走り抜き
- 田に惜しくも敗れ、悔しくもすがすがしい気分になったから。 かつて一度も勝つことができなかった大田に今日こそは必ず勝つと思っていたが、 なりふりかまわず全力で走った大
- たことが気はずかしく、 地道にトレーニングをしてきた自分の走りに自信を持っていたが、上原の見ている前で大田に自分の実力をほめられ 照れくさい気持ちになったから。
- 線部6「走り終えたみんなは、穏やかですっきりしたいい顔をしている」とあるが、 その理由として適当なものを、次の中から一つ選び、 記号で答えなさい 大田の目にそのように映る
- 夢中になれるものに全力を注ごうとしている中学生たちの姿は、同じように陸上競技に夢中になっていた自分自身と うらやましく、すばらしいものに感じられたから。
- た自分自身とも重なり、 好きなことに取り組めるというだけで満足そうな中学生たちの姿は、久しぶりに好きなことに打ち込む喜びを味わっ ほほえましく、心温まる思いがしたから。
- 分とは違って、 たがいにライバル意識を持ち競い合っている中学生たちの姿は、 晴れ晴れとして、楽しそうに見えたから。 高校で仲間に恵まれずに孤独な日々を送っている自
- 分とは違って、 結果にとらわれず一つの物事に対してがむしゃらになれる中学生たちの姿は、 さわやかで、 すがすがしいものに思えたから。 レースの結果にこだわってしまった自

- つ選び、記号で答えなさい。 線部7「上原の言うとおりだ。だけど、そうじゃない」とあるが、どういうことか。次の中から適当なものを一
- れればよいのではなく、 学校のトラックよりあぜ道や山道やアスファルトで走る方が向いているというのはその通りだが、 感動できるような走りがしたいのだということ。 ただどこででも走
- 学校のグラウンド以外で陸上部が活動をしても校則違反にはならないというのはその通りだが、 練習やレースを通して充実感を味わいたいのだということ。 ただ活動できればよ
- 中学の駅伝の時のように仲間とともに走る喜びを感じたいのだということ 高校の部活動だけにしばられることなく、自由に走ったらよいというのはその通りだが、 ただ一人で走るのではなく
- ではなく、 学校のグラウンド以外でも走れる所はいくらでもあるというのはその通りだが、ただ一人でどこかを走れればよいの 同じゴールに向かって誰かと一緒に走りたいのだということ。
- 問 次の中から一つ選び、 線部8「レースはどこでだって行われてるよ」とあるが、この上原の発言を説明したものとして適当なもの 記号で答えなさい。
- ただ走るのではなく、自分の力をためすことができる場所を探している大田の気持ちを感じ取り、
- たらどうかと提案している 学校という枠にとらわれて自分の力をもてあましている大田に、学校の外へ目を向けて、 広い世界に飛び出していく
- をうながそうとしている。 一人で走ることに孤独を感じてきた大田の気持ちを感じ取り、 たくさんの人と一緒にゴールを目指すレースへの参加

べきだとすすめている

エ とを示してはげましている 自分の生きがいを見つけられずにいる大田に、 自分をかけることができるものは、 実はいたるところにあるというこ

問九

- なくてはならないということ。 誰かの助けを必要とする時には、 年齢に関係なくまずは必死に手を前に伸ばし、助けを求める自分に気づいてもらわれた。
- る人になってほしいということ 高校生になったのだから、自分を必要とする人が差し伸べる手をしっかりつかむことで、 その人の信頼にこたえられ
- いっても良いのだということ。 中学校を卒業した後であっても、 時には誰かが差し出してくれる手をたよりにしながら、 自分の生きる道を探して
- を得る時間も必要だということ。 もう中学生ではないのだから、 自分の居場所は自分で見つけるべきだが、たまには大切な人の手を取ることで安らぎ
- 次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。 線部10「あの小さな手は、 くたくたになるまで、俺を走らせてくれる」とあるが、 どのようなことを表してい
- 鈴香のためならできる限りのことをしてやりたいと思うほど、今の自分にとって鈴香が大切な存在であるということ。
- わがままな鈴香に振りまわされ、あちこち走りまわらされてしまうことで、 いつもへとへとになっているということ。
- いつも全身で何かをうったえ、 全力で何かをしようとする鈴香がいとおしく、 何でもやってやりたくなるということ

自分を疲れさせる存在ではあるが、まだ幼い鈴香を放っておくことができずに、つい面倒をみてしまうということ。

- 問上 の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。 線部11「大田君の走る場所は中学校にはないよ」とあるが、上原はどういうことを伝えようとしているのか。
- ないということ。 駅伝には出場したが陸上部に正式に所属していたわけではないのだから、 中学校に来ても大田が走る場所は用意でき
- いってほしいということ。 中学校に戻ってこなくても、 大田が活躍できる場所はいくらでもあるのだから、 今は前を向いて新しい道を進んで
- が良いということ。 中学校で陸上部の部員たちと走るよりも、 今は大田のことを必要としている鈴香のために、 一生懸命走り続ける方いっしょうけんかい
- べきだということ。 気が進まないのは分かるが、 通い慣れた中学校に逃げ込むのではなくて、 高校の陸上部で自分の走る場所を見つける

— 14 **—**

葉を必ず用いて答えること。 鈴香が大田に気づかせてくれたことに触れながら、 線部12「俺は残っている力すべてを使って、最大限の声援を送ってくれた鈴香たちのもとへ向かった」とあるが した時とこの時とでは大田の心境に変化がみられ、その変化は「ばんばってー」という声援を送ってくれてい 大田に何かを気づかせてくれたから起きたものでもあると考えられる。大田の心境がどのように変化したの 八〇字以上、 一〇〇字以内で説明しなさい。 ただし、

まうのではないかと心配する向きもある。しかし、もうしばらくは大丈夫なのではないかと思う。 みると、その〈弱さ〉もいくつか気になるのだ。 ひとりで勝手にお掃除してくれるロボット。その能力を飛躍的に向上させるなら、わたしたちの仕事をいつかは奪ってし 一緒に暮らしはじめて

アップしたり、 、ップしたり、時には椅子やテーブルなどに囲まれ、その袋 小路から抜けだせなくなりそうになる。「アホだなぁ……」と玄関などの段差から落ちてしまうと、そこからはなかなか這い上がれない。部屋の隅にあるコード類を巻き込んでギブザや そんな姿になんとなくほっとしてしまう。

ボット〉の仲間だったのである。 きだしながら、結果として「部屋のなかをお掃除する」という目的を果たしてしまう。これも、まさしく〈関係論的なロ コードを夕べねはじめる。ロボットの先回りをしては、床の上にランザツに置かれたモノを取り除いていたりする。 こうした関わりのなかで、 部屋のなかはきれいに片づいている。このロボットの意図していたことではないにせよ、 わたしたちの心構えもわずかに変化してくる。ロボットのスイッチを入れる前に、部屋の隅の 周りの手助けを上手に引 いつの

るべきものだろう(じつは、いつの間にかパワーアップされたお掃除ロボットの仲間は、こうした欠点を克服しつつある てくれている」ともいえるのだ。 先に述べたように「コードを巻き込んで、ギブアップしやすい」というのは、一種の欠陥や欠点であり、 しかし、その見方を変えるなら、この〈弱さ〉は、「わたしたちに一緒にお掃除に参加するための余地や余白を残し 本来は克服され

対して、その連携のあり方を探ろうとする。「相手と心を一つにする」というところまで、まだ距離はありそうだけど、 は最後まで完遂してくれるのか。そうした試行錯誤を重ねるなかで、お互いの得手、不得手を特定しあう。 いあいながら、この掃除に参加している風ではない。どこまで手伝えばいいのか、どのような工夫をすれば、このロボット やくその入り口に立てたような感じもするのである。 そこで一緒にお掃除する様子を眺めてみるとおもしろい。わたしたちとロボットとは、お互いに部屋を片づける能力を競 目の前の課題に

やそれぞれの技が協働しあっていて心地よい。そうした高度な関わりにあっては、ロボットはすべての能力を自らのなかにやそれぞれの技が協働しあっていて心地よい。そうした高度な関わりにあっては、ロボットはすべての能力を自らのなかに ところだろう。 これも多様性というのだろうか、そこでは部屋の壁、わたしたち、そして健気なお掃除ロボットという、さまざまな個性 . ボットの進行を先回りしながら、椅子を並べかえ、**ショウガイブツ**を取り除いてあげることは、わたしたちの得意とする 床の上のホコリを丁寧に吸い集めるのは、 一緒にお掃除しながらも、お互いの〈強み〉を生かしつつ、 わたしたちもまた完全である必要はないということなのだろう。 ロボットの得意とするところであり、 同時にお互いの〈弱さ〉を補完しあってもいる わたしたちに真似はできない。

うとはせず、遂にはギブアップ……。そんな失敗をなんどかくりかえしても、懲りることがない。 でもどうして、 ぶつかるのを知ってか識らずか、 このような連携プレーが可能なのだろう。一つにはこのロボットの性格から来るものなのではないかと思 部屋の壁に果敢に突き進んでいく。コードに巻きついても、 そこからなかなか離れよ

アホだなぁ……」と思いながらも、 そのようなロボットのあっけらかんとした振る舞いに対して、「どうして壁にぶつかると知っていて、ぶつかるのだろう。 いつの間にか応援してしまう。

吸い集めてしまうわけ?」「すごい、これには敵わないなぁ……」というわけで、「ここはロボットに任せておこう!」とい の部屋の壁になんのためらいもなく、ユダねることをする。一方で、わたしたちも「へー、こんなところのホコリを丹念になる。 うことを徹底させている。 示しあい、そして補いあう。 示しておくことである。「いま、どんなことをしようとしているのか」「どんなことに困っているのか」、そうした もう一つのポイントは、相手に対する〈敬意〉や〈信頼〉のようなものではないだろうか。お互いの〈弱い〉 先に述べたように、わたしたちの共同行為を生みだすためのポイントは、自らの状況を相手からも参照可能なように表 ためらうことなく開示しておくことで、お掃除ロボットは周りの手助けを上手に引きだしているようなのである 一方で、 その〈強み〉を称えあってもいる。このお掃除ロボットは相手を信頼してなのか、そ ところを開

持たれつという共生をちゃっかり成功させているようなのである。 人とロボットとの共生という言葉があるけれど、自らをわきまえたお掃除ロボットは、 わたしたちとのあいだで、

わゆる「ひとりでできるもん!」をめざそうというのである。そこで一面的な利便性は高まるように思うけれど、一方で ここしばらくの「利便性を追求する」というモノ作りの流れは、個々の〈弱さ〉を克服することに向けられてきたようだ。 〈持ちつ持たれつの関係〉から遠ざかってもいるようだ。

ボットの高機能さは、わたしたちの優しさや工夫を引きだすのではなく、むしろ傲慢さのようなものを引きだしてしまうよ に対する要求をエスカレートさせてしまう。そうした要求に応えるべく、技術者も新たな機能の開発に勤しむことに。ロ8_ とでわたしたちの手間もだいぶパブけることだろう。ただどうだろう、 もなければ、ちょっとした段差であれば大丈夫! 誰の助けも借りることなく、きっちりと仕事をこなしてくれる。 すかさず「もっと静かにできないの?」「もっと早く終わらないのかなぁ」「この取りこぼしはどうなの?」と、 例のお掃除ロボットがもっと完璧にお掃除するものであったらどうだろう。もうコードに巻きついてギブアップすること それでおしまいということにはならないようなのだ 、そのこ

れてしまうことだろう。 した「なし崩しの機能追加主義」そのものだろう。「もっと、もっと」という要求のなかで、 手を緩めるわけにいかない。これは、いわゆる〈足し算のデザイン〉の姿であり、認知工学者のドナルド・ノーマンの指摘 新たな機能がついているというだけで、 アピールに、「えっ、そのサックリ解凍って、なに?」と思いつつも、 して、毎年のように新たな工夫が加えられる。「今年の電子レンジは、 これはお掃除ロボットに限らず、 他の家電製品などにも当てはまるものだろう。量販店に並ぶ商品には、「新機能」と称している。 ちょっと得した気分になるからだろう。そうしたこともあってか、作り手としても なにげなく選んでしまう。同じ価格であれば、その サックリ解凍機能がついてるんです!」との店員の いつの間にか消耗戦を強いら

てしまう。こうした図式は、モノとの関わりに限らず、いま至るところに生じているようなのだ。 <お掃除してくれるロボット〉と〈それを使う人〉、その役割のあいだに線を引いた途端に、相手に対する要求水準を上げ。

せりの講義を準備すればするほど、 高めてしまう。その結果、〈介護する人〉と〈介護される人〉とのあいだに垣根が生まれてしまう。あるいは、至れり尽く。 おばあちゃんの世話をするというなにげない関わりが職業となった途端に、「もっと、もっと」と、 〈教師〉に対して「もっと大きな声で、 もっと手際よく」と〈学生たち〉からの要求が 相手に対する要求を

エスカレートしてしまうこともある。

時には「えっ、なにこれ? ちょっとわからない、どうしよう……」という学生たちの緊張感も必要だろうと思う。 し緊張した関係性がむしろ豊かな学びを引きだしているようなのだ。 ばすでに心得ているように、「この説明では誰も理解できないだろう……」という講義も何回かに一度は許されてもいい。 こうした場面に遭遇するたびに、お掃除ロボットの気ままさやあっけらかんとした姿もいいなぁと思う。老練な教師 なら

回はちょっと危ないかも……」と早めにつぶやいてくれたら、それに対するわたしたちの備えや工夫をもっと引きだせるは 夫!」と防潮堤はいつも強がろうとするけれど、ときには〈弱さ〉を認め、開示することも必要なのだろう。「あれっ、 潮堤をもっと高くして!」との要求が高まるけれども、それにも限度はある。「これくらいの高さがあれば、きっと大丈 防災分野などでも「防潮堤のの存在ゆえに、住民の避難行動に遅れが生じる」という。津波の災害にあうたびに、 「あの防

関係性も大切にしたい。「さすが、慣れたもんだね……、こんなところを器用に運転できるんだから……」とつぶやく自動自動運転システムとはならないだろうけれど、ときにはお互いの〈弱さ〉を補完しつつ、相互の〈強み〉を引きだすという 運転システムを横目に、 ルマというのも便利そうだけれど、 ……」とときどき弱音を吐いてくれたら、ドライバーもすこしは手伝ってあげようかという気になることだろう。 同様のことは、 いま各方面から期待されつつある人工知能やロボットにも当てはまるものだ。自動で運転をしてくれるク ときには得意顔でドライバーがハンドルを握るような場面があってもいいのだ。 いつも強がってばかりいてはどうかと思う。「ちょっと、こんな霧では自信がないなぁ これでは

(岡田美智男『〈弱いロボット〉の思考 わたし・身体・コミュニケーション』)

- ロボットがどのような点ですぐれているからか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。 線部1「ひとりで勝手にお掃除 ― いつかは奪ってしまうのではないか」とあるが、そのように考えてしまうの
- 自分の能力や技術を向上させ続けられる点。
- 難しい計算でもすぐに行うことができる点。
- ウ 状況に合わせて臨機応変に行動できる点。
- 与えられた仕事を正確に実行し続けられる点
- なものを一つ選び、 線部2「わたしたちの心構えもわずかに変化してくる」とあるが、どう考えるようになるのか。 記号で答えなさい 次の中から適当

— 19 **—**

- ロボットにたよらず自分だけで何とかしようと考えるようになる。
- ロボットが失敗を繰り返す様子を健気だと考えるようになる。
- ロボットのことを仕事を分かち合う相手だと考えるようになる。
- ロボットの欠陥を克服しなければならないと考えるようになる。
- 線部3「見方を変える」とあるが、 どういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、 記号で答えなさ
- ア ロボットが人間に活躍の機会を与えてくれているのだと見ること。
- 人間の手助けがロボットの欠点の克服に役立っていると見ること。
- ロボットの弱点をむしろ人間の弱点を知るヒントとして見ること。

人間とロボットとは互いに助け合うべき存在であると見ること。

- るのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。 線部4「そこで一緒にお掃除する様子を眺めてみるとおもしろい」とあるが、なぜ筆者は「おもしろい」と感じ
- 互いの様子をうかがい合ううちに、 人間とロボットが力を合わせて掃除を進めていくことになるから。
- 人間とロボットが試行錯誤を重ねることで、これまでより効率よく掃除が行われるようになるから。
- 協力して掃除を進めていくうちに、気がつけば人間とロボットが心を通じ合わせるようになるから。
- 人間とロボットがそれぞれ得意なことに取り組むうちに、いつの間にか掃除が終わっているから、
- るが、なぜか。その理由として適当なものを、次の中から一つ選び、記号で答えなさい。 線部5「そうした高度な関わりにあっては、ロボットはすべての能力を自らのなかに抱え込む必要はない」とあ
- すべての能力を身につけてしまえば、 向上する余地がなくなってしまうから。
- 足りない能力があるからこそ、他者の力を引きだすことができるから。

さまざまな個性と協働できるような能力があれば、それで十分であるから。

- 完璧に仕事を行う能力があると、 いつかは人間の仕事を奪うことになるから。
- 出しに続けて、 線部6「でもどうして、このような連携プレーが可能なのだろう」とあるが、 六〇字以上、 八〇字以内で答えなさい。 なぜ可能なのか。 解答らんの書き

- ロボットに完璧な仕事ができるのなら、人間がする仕事はなくなってしまうということにはならない
- ロボットだけで仕事をこなせるのだから、 人間とロボットの共生は必要ないということにはならない。
- ロボットが人間の手を借りることなく、自分一人だけで仕事ができれば十分ということにはならない。
- ロボットと人間が仕事を分担することで、 持ちつ持たれつの関係が成立するということにはならない。
- ういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、 線部8「ロボットの高機能さは、 - むしろ傲慢さのようなものを引きだしてしまうようなのだ」とあるが、 記号で答えなさい。
- ロボットが完成されたものになればなるほど、人間が自分たちの弱点を認めようとしなくなってしまうということ。
- ロボットの性能が高まれば高まるほど、 ロボットに対する感謝や尊敬の気持ちを失っていってしまうということ。
- ロボットの機能が向上すればするほど、面倒な仕事は何でもロボットに押しつけようとしてしまうということ。

— 21 —

ロボットが有能になればなるほど、 ロボットがさらに便利で完成されたものとなるように望んでしまうということ。

- 問十 次の中から適当なものを一つ選び、 線部9「その役割のあいだに線を引いた途端に」とあるが、「役割のあいだに線を引」くとは、どういうことか。 記号で答えなさい。
- せるべきかを判断すること。 人間が生活していく上での便利さと生きがいのバランスを考えに入れて、 ロボットにはどの程度の性能や役割をもた
- に立場をはっきりさせること。 一つの課題を協力してやりとげようとするのではなく、仕事をするのはロボットで人間はそれを使うだけというよう
- を出さないようにすること。 ロボットの弱点を理解し、 人間はそれを助ける工夫をしながらも、 ロボットが得意とするところは徹底的に任せて手
- 工 確に定めて仕事をすること。 ロボットの得意な領域と人間が得意な領域とを冷静に見きわめ、 互いに相手の領域をおかさないように役割分担を明
- を一つ選び、記号で答えなさい。 システム ― あってもいいのだ」とあるが、ここには筆者のどのような考えが表れているのか。次の中から適当なもの -線部10「『さすが、慣れたもんだね……、こんなところを器用に運転できるんだから……』とつぶやく自動運転
- かねない危険をはらんだことなのだということ。 人工知能やロボットも完璧ではあり得ず、それを無条件に信頼してしまうことは、 実は思わぬ事故や失敗につながり
- 力していくことは欠かせないのだということ。 人工知能やロボットがどれほど高度な機能を備えたとしても、 やはり人間にしかできないことは必ずあり、 互いに協
- 化させないために必要なことなのだということ。 人工知能やロボットにあえて弱点を残しておくことは、 人間と人工知能が協働することにつながり、 人間の能力を退
- がら課題の解決を目指すのがよいということ。 人工知能やロボットも能力が高いことだけがよいのではなく、 人間が参加できる機会を残し、 両者の特長を生かしな

	問		兰	
	 			· ··
			,	
•••••				
		••••		
100	80			

				V
問十	問七	問四	問一	右のらん
				に は 何 む
				右のらんには何も書かないこと。
問土	問八	問五	問二	٤
				Œ
	問九	問六	問三	
				角名
				角名戶系
				合 計

平成三十年度 一般入試① 国語解答用紙(1)

受 験 番 号 名 名

2 3 平成三十年度 4 (5) 受験番号 一般入試① 国語解答用紙(2) 氏 名

◆右のらんには何も書かないこと。

1

計

小

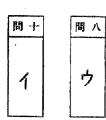
	間		士	
探	\	寧	7	崮
U	自	بع	٧,	狡
术	10	L	7=	[:
9	Ø	1	人	入
7	Ł	<	\Đ	7
纺	3	41	0 1"	7
`	揚	h		η,
j	育	人	翰	5
ط	P	ŧ	李	Ø
ι`	自	L,	Ø	自
う	10	b	声	17
芃	ŧ	3	援	15
抙	邁	Ł	(s	رڏا
15	")	1=	Ļ	Ø\"
(;	文	岚)	L '
18	7	2"	7	13
2	ъ	<	自	\$
1:	ŧ		10	Ł
0	0)	k	ŧ	感,
100	を 80	1"	泤	U.

			_	•	
間十	問七	間四	問一	石のらん	0
7	エ	ゥ	1	石のらんには何も書かないこと。	2
				書かない	3
問士	間八	問五	問二	28	4
		1	I		(5)
1	エ				
		WH			
	問九	問六	問三		
	ウ	P	ウ		解答用紙 2
		•			
				合	計
•					

一般入試① 国語解答用紙(1)

受験番号

氏 名



問土	間	九
エ	1	,

	割		七	
	4	Ł	<	人
	h	ŧ	-	間と
	Ø	15	ĸ	ボボ
	猪	•	7"	ット
80	60 77	互	. •	lţ
ACCESSED ASSESSMENT	委	١,	FB	自
	生	ıs	Ŧ	'n
	1st	#U	n	n
	7	4	争	13
	ž	ŧ	助	*
	Z	信	17	ŧ
	L	頼	Ę	隐
	7	7	Ŀ	*
	١,	3	手	Ŧ "
	3	4	15	1.00
	19 `	K	31	P#J
	5	7"	! ¿	<i>漬、</i>
	э	•	ħ"	L
		ž	Ŧ	7
				ļ

問五	間三	間
		d
P	I	李
博六	FI -	e
		Macada cale alboway distributed to recomm
1	ウ	省
		STOCK MICHINATOR INCOMESSAGE
	問四	• .
	7	
	Lugraman M	

•	
右のらん	0
▼右のらんには何も書かないこと。	2
も書かな	3
いこと。	4
	(5)

束

b

乱

雑

c

障害物

	受	験	番	号
	-			
-				
1				

平成三十年度

一般入試① 国語解答用紙 (2)

ے اد	14076	, ISS.	-3
l			

氏 名

	小	計
L		